

朔東の冬は厳しい。この厳しい積雪寒冷の地において朔東健児達は日夜訓練に励んでいる。言うまでもなく、冬季作戦においては、積雪寒冷を克服した者に勝利の栄冠は輝く。冬季野外行動能力を練磨することは重要である。そういう意味において、熊師団第 5 師団各部隊は、創意を凝らした冬季訓練を行っている。それを紹介しよう。生地を活用した訓練あり、演習場を活用した訓練ありと多彩である。尚、生地即ち部外地の使用については関係当局の許可を得ていることは言うまでもない。

① 美幌連隊の 100 キロ縦走

美幌連隊は、3 日間掛けて、津別峠に至る冬季閉鎖地点である峠下を起点として、津別峠、展望台、サマツカヌプリ(標高 974m)を経て美幌峠(標高 525m)を終点とする概ね稜線コースを少しずつコースを変えて計 100 キロを踏破しようというものである。



(林内での小休止風景:山下撮影 2/20)

初日に視察・激励する機会があったが、当日は絶好の天気恵まれて、屈斜路湖も一望でき、微かに御神渡りと思しき湖上の一筋を確認し得た。連隊長以下約 400 名の隊員がそれぞれ、20 キロ程度の背嚢を背負い、中隊は、緊急用をも兼ねた 1 艘のアキオを曳行する。

唐松林の中には相当な急勾配の斜面もあり、制動に失敗すると屈斜路湖に飛び込んでしまいそうな、そんな恐怖心を抱かせるところもある。ストック制動で慎重に下る。こぶあり、急斜面あり、林も密であったり、アキオの行進速度が計画よりも遅い。

天候が悪い時には、吹き曝しになった所は、横風に体勢を崩されそうになるようだ。

連隊は、この 3 日間の縦走行軍終了後は、然別演習場で冬季野営訓練に突入する。

② 旗本連隊の糠平湖から然別湖への峠越え行軍

かつては、師団の冬季検閲の定番コースであったが、久々の挑戦である。糠平湖畔、道道の冬季閉鎖地点から急勾配の道路を 9 キロ、幌鹿峠に至り、それから 10 数キロを下って然別湖畔までの 26 キロ余りの行程である。出発は夕方、目的地到着は、未明を予定している。深々とした真っ暗な道を雪明かりのみを頼りに粛々と、寂として声もなく、ただ只管に目的地に向けて進む。休憩時間にこまめに体の手入れをする者は最後まで体力を維持できる。ずぼらな者は積雪寒冷での作戦・行動では生存すら覚束ない。帯幌の普通科連隊も然別湖畔までの行進終了に引き続き然別演習場で訓練検閲を行う予定である。

尚、本訓練の一環として、経路上山田温泉(秘湯として有名)で、山岳遭難者のヘリ又は大型雪上車による収容訓練を実施して、実行上の問題点等を検証する。

③ 矢白別演習場を連続状況下で一周する釧路連隊

前二者の訓練は、何れも部外地を利用して雪中行進訓練を行おうとするものであるが、部外地では宿営即ちビバーク(bivouac)の訓練が中々出来ない。日本最大の矢白別演習場の外周道路を連続状況で一周しようと壮大な試みに挑戦するのは、釧路に駐屯する連隊である。

総里程は、100キロには満たないが、約70キロを連隊長以下500名弱が夜間行進、宿営行動を含み実施する。難所は、夜間における急斜面の下りである。錬度の高い部隊は、次から次へと流れるが如くに下っていくが、レベルの低い部隊は、前の者が安全に滑り降りたことを確認した後滑る事になるので時間を要する。また、宿営を前提としているので相当の携行物品となる。アキオも嵩張り、重心が高くなり、非常に不安定だ。カーブのコントロールにはベテランの技術が必要だ。

②、③については、視察・激励する予定であるので、紹介する事もあるかも知れぬ。

尚、他の部隊においても同種の訓練を行っているが、割愛する。野外における患者の後送にはアキオや雪上車を使用するが、その種の訓練も衛生隊では行っており、部隊装備火器をアキオで曳行したり、大型雪上車が牽引するロープに多数の隊員が捕まって引っ張られるジョーリングという訓練も行われる。このジョーリングが意外に難しい。

火砲陣地や指揮所を構築する為に、アイスクリートと呼ばれる氷を固めたブロックを使ったり、凍土を爆破して陣地を構築したりと各部隊は創意を凝らしている。

何れにしる、冬季訓練では、その行動能力の如何が死命を制する。